

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

ユニセフ親善大使

黒柳 徹子 氏

東京、乃木坂生まれ。トモエ学園に学び東京音楽大学声楽科を経て、NHK放送劇団に入団。ラジオドラマ「ヤン坊、ニン坊、トン坊」でデビュー後、NHK専属テレビ女優第1号となる。さらに文学座研究所、ニューヨークの演劇スタジオでも学び、現在まで日本を代表する著名なテレビ・パーソナリティ、舞台女優、作家として活躍中である。（『トットちゃんとトットちゃんたち』著者略歴より抜粋）これらの氏の多方面の業績については、すでに数々の放送功労賞、芸術賞、文学賞が授与されている。

しかし、ここに見逃しえないのは、子どもの生存と教育に関する氏の尽力である。すなわち、1984年より現在までの15年間、ユニセフ親善大使（世界で4人目、現在は映画監督アッテンボロー、歌手ベラフォンテなど5人中の1人）として、タンザニア、ニジェール、インド、モザンビーク、カンボジア、ベトナム、アンゴラ、バングラデシュ、イラク、エチオピア、スーダン、ルワンダ、ハイチ、ボスニア・ヘルツェゴビナ等の国々を歴訪し、「助けを求めろ」子どもたちを励まし、その窮状を広く訴えた。この活動はそのつど、テレビを通して報道されたが、その著『トットちゃんとトットたち』（講談社、1997年）（注 タンザニアのスワヒリ語で「トット」とは子どもをさす）によってその詳細を知ることができる。

氏は、様々な危険をおかしつつ無数の難民のなかに身を投じ、荒れ果てた孤児院・病院・学校を訪れ、飢えと疫病と孤独に苦しみあえぐ子

どもたちを、文字通り「抱きあげ」彼らに「ほおずり」し、愛と励ましのメッセージを伝えた。それは、ともすれば陥りがちな絶望感をはねかえし、子どもを愛し信じ、「いっしょにやろう」（氏の恩師、トモエ学園小林宗作校長の言葉）という信念の力強い発露であり、私たちへの痛切な呼びかけであった。このような信念と活動に促され、氏の口座を通してユニセフに寄せられた募金は23億3835万768円、15万4630件（1997年5月現在）に達したという。しかし、「助けを求めろ」世界の子どもたちの背後には「戦争」と「貧困」という抜きがたい社会悪がひかえ、今後なお厳しい戦いの続くことが予想される。

鑑みれば、ペスタロッチーの生涯の関心事もまた、貧民と孤児の救済にあった。ノイホーフの貧民学校、シュタンツの孤児院、さらには初期の著作『隠者の夕暮』『リーンハルトとゲルトルート』『立法と嬰兒殺し』など、彼の教育活動と思索の原点はまさに人類愛にあり、それに基づく社会改革の戦いこそ彼の終生を貫くものであった。

現代の日本で「心の教育」が強く求められるとき、黒柳徹子氏のユニセフ親善大使としての活動は、子どもへの愛と信頼を呼び起こし、子どもを取りまく社会諸悪に立ち向かう勇気を喚起させ、合わせて、ペスタロッチー精神を想起させるものといってよい。

氏の長年にわたる多大な功績は、今日の困難な教育状況下におかれた子どもたちに向き合い、揺るぎない信念をもって真摯な実践を積み重ねてこられたことにある。ここにはまさに「教育の原点」が体現されている。黒柳徹子氏に、第7回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、その功績を高く顕彰したい。